



鳥取県知事
平井 伸治

人と人、国と国とを繋ぐもの

もう30年以上も前のことになるが、初めて本格的な国際交流に携わったのは1981年のことだった。国際障がい者年と国際連合により定められた年を記念して、日本で第1回国際アビリンピック（International Abilympics）が開催された。

世界中の障がい者が職業技能を競う祭典であるこの大会に、大学生だった私は、海外の障がい者を受け入れる日本赤十字のボランティアとして裏方に参加した。私はタイ選手団の受け入れ担当となり、微笑みの国タイの障がい者と役員をお迎えした。まだ若輩だった私たちボランティアにも、実に優しい笑顔たたえて接してくれた。団長は王族の方で立ち居振る舞いに気品があふれていた。仏教国だからであろうか、障がい者の装具なども充実しており、社会福祉については日本よりも進んでいると感じた。競技は真剣そのもので、幸い木工ペイント部門でタイ選手が銀メダルを獲得した一方で、賞に漏れた選手は落胆を隠せなかった。後で、入賞すれば帰国後仕事に恵まれると聞き、厳しい現実も思い知らされた。

タイ選手団はまとまりがよく穏やかで、他国担当ボランティアから羨ましがられたが、実は言葉がうまく通じない悩みがあった。私たちは英語を集中練習して大会に臨み、英語で色々語りかけ、先方も笑顔で聞いておられた。しかし、笑顔の裏で、実は余り理解していただけていないと段々分かってきた。そんな悩みを見かねたのか、選手の一人がタイ・英辞書を下さったが、タイ語が読めないのかえって頭痛は深まるばかり。

数日経つと転機が訪れた。選手団には聴覚障がい者もおられたため、選手団は手話を時折使っておられ、「あっちへ行こう」という手話をボランティア仲間が見出したのである。以後手話を使ってスムーズに選手団を案内できるようになった。僅かなタイ手話や、時々通じる英語、身振り手振りで、言葉が分からないなりに心を交わすことができたのである。困った顔をすると、タイの人は必ず「マイ・ペン・ライ」（気にするな）と声をかけてくれた。ゆったりとした時が流れた。

帰国時には親戚のような間柄になって、別れを惜しみ、感謝の気持ちを表してくださった。私も覚えたてのタイ語で、手を合わせて「サワディー・クラブ」（さようなら）、「コップン・クラブ」（ありがとう）と頭を下げた。

2013年10月鳥取県では全国で初めて「手話言語条例」を制定したが、手話は音声言語と同等のコミュニケーション手段となる言語だという信念の裏には、こうした学生時代の原体験がある。

人と人、国と国とは、結局、理解しようという心でこそ結ばれる。言葉ではない。